

ひかわちょう 島根県斐川町におけるひまわり栽培の取組について

斐川町農林事務局 黒崎 恭孝
(JA斐川町 営農第一課指導員)

(1) 斐川町のひまわり生産の概要

斐川町は島根県東部の出雲平野に位置し、県都松江市を宍道湖の対岸に置き、出雲市と斐伊川で隣接する面積80.64km²、人口約28,000人の町である。斐伊川の流れによって形づくられた肥沃な出雲平野を中心に、平地部が全体の約7割をしめ、古くから農業を中心に栄えてきた。また、若者の定着と雇用の場の確保のため企業誘致にも力を入れ、全国有数のハイテク企業も数社進出し、県内では数少ない人口の増加している町である。

古くから農業基盤整備を積極的に進めた結果、圃場整備率は98%に達し、確立された農業基盤と恵まれた立地条件の中で、土地利用型作物(米・麦・大豆・ハトムギ)を中心に輪作体系による団地化によって収益性の高い農業経営を目指している。

また経営の多角化、収益性の向上を目指して玉ねぎ、キャベツを中心とした露地野菜や青ねぎ等の施設野菜の栽培面積拡大及び定着化を推進しながら多様な農業の担い手の育成に努めている。

斐川町のひまわり栽培は、平成13年に宍道湖周

辺で出雲空港に隣接する瑞穂営農組合の設立にあわせて始まった。この地域は斐川町で最も地盤が低く、湿害等の影響を受けやすい地域であり、二条大麦の固定団地の後の作物をどうするか、組合長を中心に話し合いがなされ、

- ①空港周辺の空の玄関であり、観光客を楽しませたい
- ②花はきれいで、栽培していて楽しい
- ③菜の花エコプロジェクトのようにエネルギーを含めた環境対策にも貢献したい

という理由から、ひまわり栽培について営農組合全体での意思決定がなされた。

平成13年度は初年度ということもあり、5haの栽培であったが、平成14年には隣接する昭和営農組合、東島営農組合とも共同で栽培を開始し、面積を20ha規模に拡大、景観用・地力用としてではなく、新たな特産品としてひまわり油の生産を目指し栽培が行われていった。また、観光イベントとして地元主催のひまわり祭も開催し、地域特産物や農産物の販売など県内外から毎年約3万人の観光客の来場を得ている。

平成15年には、本格的な搾油・食用油商品販売に向け、事業主体をJA斐川町とし「植物種子搾油設備」の導入を行い、「ひまわり油」と「ひまわりドレッシング」の商品販売を開始した。

【植物種子搾油設備の概要】

設置場所	JA 斐川町農産加工場
処理能力	420kg/日 年間処理量75t
総事業費	36,676千円

その後、ひまわり油を活用した特産品開発にも力を入れ、平成18年には、ひまわり油と斐川産米粉をブレンドした新商品「つるつる手延べうどん」、翌平成19年には「つうつる手延べそうめん」

【主要農産物の栽培面積・農業産出額】(H20)

作物名	面積 (ha)	販売額 (千円)
水稲	1471	1,277,643
麦	381	69,369
大豆	306	37,785
ハトムギ	40	19,189
ひまわり	23	2,113

【担い手の状況】(H21年3月末)

経営体区分	数	
	(人・組織)	内法人
認定農業者	81	5
特定農業団体・法人	31	2
集落営農組合	5	
合計	117	7



【植物種子搾油設備】

【ひまわりの栽培面積の推移】

年 度	面積 (ha)	栽培組織
H13	5	瑞穂営農組合
H14	15	瑞穂営農組合
		昭和営農組合
		東島営農組合
H15	20	瑞穂営農組合
		昭和営農組合
		東島営農組合
H16	30	おきす営農組合
		福富営農組合
		自彊地区営農組合
H17	33	おきす営農組合
		福富営農組合
		自彊地区営農組合
		どてまち営農組合
H18	34	おきす営農組合
		福富営農組合
		自彊地区営農組合
		どてまち営農組合
H19	27	おきす営農組合
		福富営農組合
		ファーム自彊上営農組合
		どてまち営農組合
H20	23	おきす営農組合
		福富営農組合
		ファーム自彊上営農組合
		どてまち営農組合

の販売を開始している。

栽培面の支援に関しては、栽培農家（営農組合の意向を受けながら、中央農業総合研究センター・近畿中四国農業研究センター・県・町・JAが一体となって技術支援を行っている。また、転作助成金（産地確立助成金）において搾油用ひまわりに対する支援として5,500円/10aの資材費助成を実施しながら栽培支援を実施している。

（2）生産上の課題と対応の状況

○湿害対策…ひまわりは耐湿性が弱く、生産上では湿害対策が大きな課題となっている。初期生育量の確保が花の大きさを決定することから周囲作溝や中溝の設置、縦浸透の悪い圃場では弾丸暗渠を行っている。又、播種方法（小明渠作溝同時浅耕播種、畝たて同時播種）により湿害回避も実施している。

○播種時期…6月上、中旬播種では生育初期に梅雨時期が重なるため、排水対策は万全にしている。7月播種では遅くなりすぎると子実重量の低下に



【小明渠作溝同時浅耕播種（ハトムギ）】



【畝たて同時播種】



【ひまわり油を活用した加工品】

よる収量減、キロ当たりの搾油率の低下等問題があるので、7月10日までを目安としている。

○鳥害対策…ひまわり種子は鳥の嗜好性が高く鳥害も大きな課題となっている。収穫直前に渡り鳥（アトリ）の被害に遭うことから生産者にとって精神的ダメージが大きく生産意欲を減退させる原因になっている。又、湿害対策の為に播種時期を遅らすと鳥害に遭いやすいことも確認しているため、現在、生産者、関係機関一体となり対策を検討している。

（3）品種・種苗供給の現状と課題

平成21年産についてはオレイン酸含量の高い「春りん蔵」を主力品種として栽培している。昨年までは「ハイブリッドサンフラワー」を栽培していたが、種子確保が出来なかった為、種子の変更を行った。「春りん蔵」は景観形成、搾油等に向く品種であり、昨年試験栽培を行い単収が高かったことから選定した。

今年は、播種時期に低温・長雨・日照不足という近年にない天候となり農産物全体に大きな影響があった。7月上、中旬に播種した圃場では集中豪雨により再度播種することになったが、天候は

安定せず2回目の播種が終了したのが8月中旬になった。追加分の種子は思うように確保できず安定的に種子を確保することが課題となっている。

（4）ひまわり生産の今後と振興上の課題

ひまわりの大規模機械化栽培を開始してから8年が経過し、播種や収穫作業における機械化技術の改良を行いながら対応してきた。今後は、異常気象による豪雨災害にも対応した栽培指針の確立など、安定的な生産技術

の確立のためには、まだ多くの課題が残っている。平成18年から、大手の製油メーカーとの取引も開始している。油量の確保のため、収穫する種の収量の増加に対する対策も必要である。加工品を安定生産していくには、現在の栽培面積（20ha程度）は最低限必要と考えており、品質重視の観点から面積拡大の振興よりも当面は現在の栽培規模を確保できるよう推進していく。引き続き、関係機関が連携して、斐川町における最適な栽培技術の確立を目指していかなければならない。

また、生産と併せて、搾油した油及び関連する加工品の販売経路の確保も引き続き行っていく必要がある。ひまわりが持つ観光資源としての要素を活用しながら付加価値の高い加工品のブランド化に取り組み、また、斐川町内の他の農産物や特産品、加工品を含めた総合的な売れるものづくり戦略を構築していかなければならない。

・執筆協力 斐川町役場 農林振興課
勝部 宏樹